

1996. 6. 1

第2回：潮崎山古墳－備後南部の初代首長の墓

○潮崎山古墳の位置

備後地域の母なる川－芦田川－の下流域、芦品郡新市町に、備後南部では最古と考えられる古墳が残されています。

新市町相方字汐首に所在する「潮崎山古墳」がそれです。

芦田川の支流である神谷川が合流するあたりからやや下流、南側の丘陵の尾根の先端部にこの古墳は築かれています。

下の平地からの比高差は約50m。芦田川にせりだした形の尾根であることから、川の北側からもよくその位置のわかる古墳です。

初期の古墳の築造は、その支配する集落のよく見える高い位置に認められるといわれますが、まさしくこの潮崎山古墳の立地は、集落を見下ろすと同時に、集落からもあおぎ見る存在である、「首長の墓」の性格をよく表しています。

○古墳の形

この古墳は前方後円墳であると考えられています。

確かに、現在千葉家の墓のある西側の円丘部に立って、東側を臨むと祠の立つ平坦部があたかも前方部のように広がっているのがわかります。

しかし、この前方部と見られる部分は、祠（潮崎神社）に伴う削平を受けていることも考えられます。そこで、円墳とも考えられているのです。

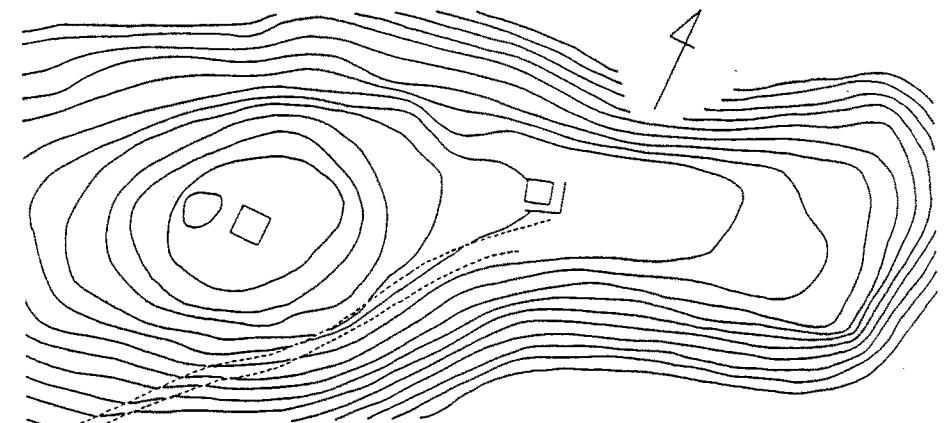
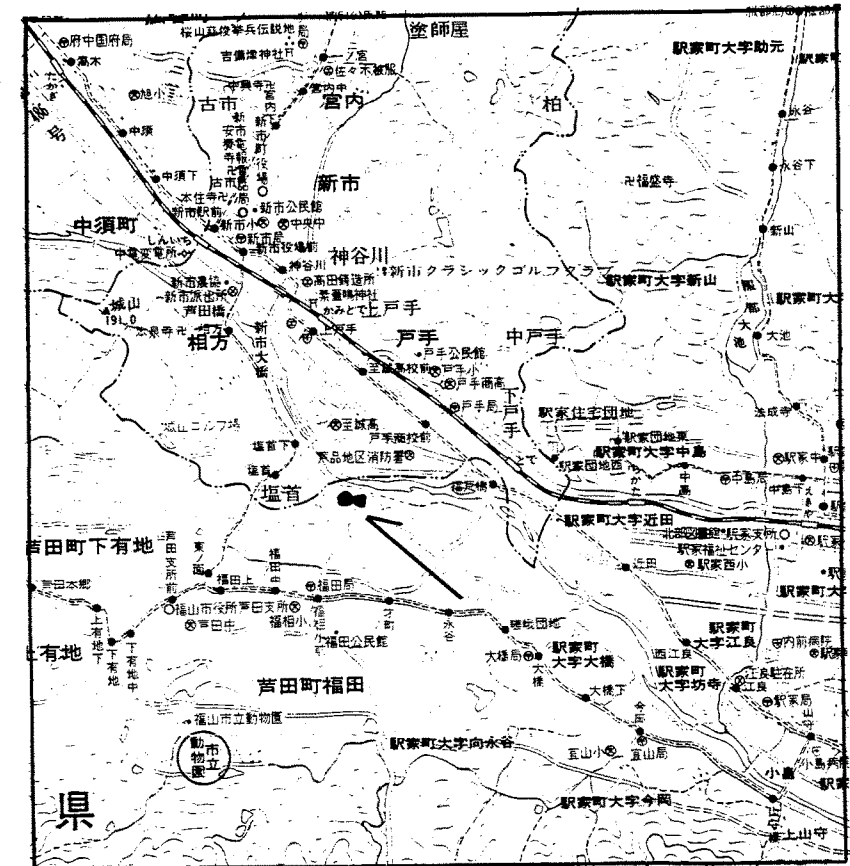
というのは、次の2つの理由です。

まず1つは、前方部とするとその長さは15m近くになり、ほとんど後円部の直径と変わらなくなってしまいます。前期古墳の前方部としては、これでは長すぎるといえます。また2つ目に、この部分がかなり平坦であることです。

そこで、昭和53年に測量調査が行われ、その墳丘測量図が作られました。

測量図で見ますと確かに前方後円墳のように見えます。また、現地でその前方部と見られる部分をよく観察してみますと、前方部の隅から正面にかけてはよく形を残しています。

さらに、後円部の南北の部分について、どちらも比較的傾斜の強い地形であるうえに、南側は上り道によりかなり削られていますし、北側もかなり土が流されているように見えます。したがって、現在後円部と考えている部分は本来はもう



潮崎山

0 10m

図出典：上掲・脇坂「広島県芦品郡潮崎山古墳について」

少し大きなものであった可能性もあるのではないのでしょうか。

としますと、全体として、前方後円墳の形であると認めてよいと考えます。

現存の長さで、墳長は約30m。後円部径は18mで、高さは2m。前方部の長さは約13m、幅約6mを測ります。前方後円墳としては、小型のグループに入るものといえます。

○古墳の外部施設

この古墳には、葺き石は残っていません。

また、埴輪も確認されていません。

○古墳の主体部

この古墳の発掘調査は行われたことがありません。

しかし、江戸時代の地誌である「西備名区」によりますと、現在前方部にある潮崎神社を新たに後円部の上に立てようと掘ったところ、「自然石の長五尺ばかり、横三尺余もある岩あり、是をかへしみれば、下は石槨なり。割ままの石を石灰にて詰め」であったとのことですから、竪穴式の石室があったことが想像されます。

○古墳の副葬品

この古墳の副葬品は、偶然の発見であったこともあって詳しいことはよくわかっていません。ただ、先の「西備名区」によりますと、鏡の出土があったとされており、現に潮崎山古墳出土と伝える「三角縁神獣鏡」があります（個人蔵）。

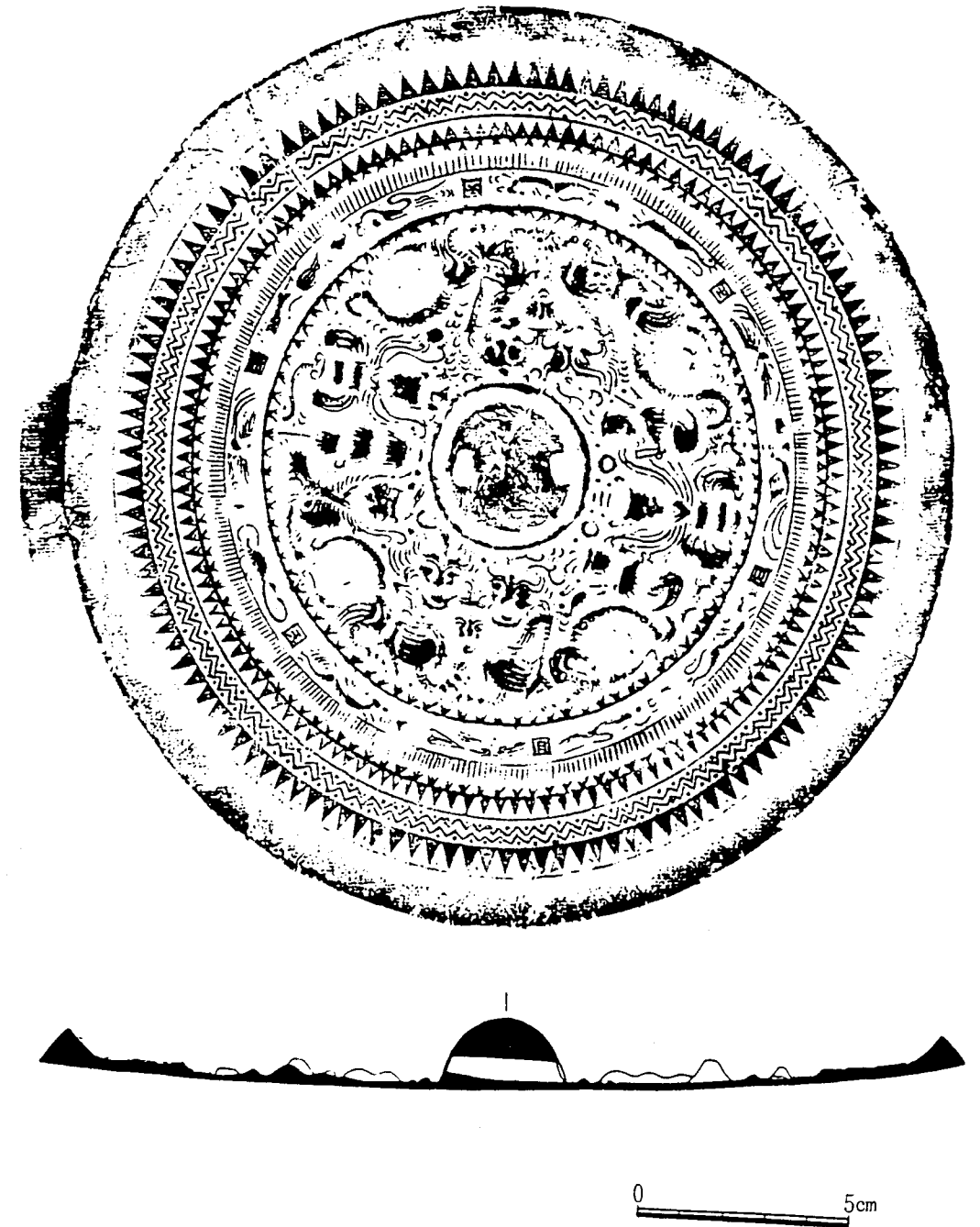
この鏡は直径22cm。鏡の縁の部分には断面が三角形。外区には鋸歯文帯―複線波文帯―鋸歯文帯が三重に描かれ、内区には獣文帯が描かれています。主文区は、乳によって4つに区分され、道教の神と霊獣とが描かれており、まさしく「三角縁神獣鏡」の条件を満たすものといえます。

このほかに、短冊型の鉄斧（長さ24.8cm、幅5.5～7cm）が出土しています。

○古墳の年代

この古墳は、その出土する「三角縁神獣鏡」から、備後南部では数少ない4世紀代のものと考えられています。

同時期に属するものとしては、神石町の辰の口古墳がある程度です。



潮崎山古墳出土三角縁神獣鏡

○前期古墳から出土する「三角縁神獣鏡」について

1。「三角縁神獣鏡」とは

潮崎山古墳から出土している鏡は、「三角縁神獣鏡」と呼ばれる種類のもので、この型式の鏡は前期古墳から出土することが多く、なかには年号を刻んだものもあって（しかも卑弥呼が魏に使いを送った景初三年が含まれる）、魏から卑弥呼に送られた「卑弥呼の鏡」とされています。

「三角縁神獣鏡」と呼ばれるための条件は、先にあげた4つです。そして、この鏡のもう一つの特徴が、同じ鑄型もしくは同じ型で作った規格品（同范鏡）が多いということです。

2. 魏の鏡か、国産の鏡か

「三角縁神獣鏡」が魏の鏡であるとされたのは、次の理由です。

- ① 卑弥呼が魏に使いを出した年（景初三年）と使いの帰国した年（正始元年）の年号をもつものが出土していること。
 - ② 「三角縁神獣鏡」のなかには「銅は徐州に出で、師は洛陽に出づ」という銘文をもつものがありますが、この2つの地名が存在した時期は魏・晋の時代。さらに、晋代では「師」という文字は晋王朝の祖である司馬師の名前をはばかって使っていたので、魏の時代のものといえること。
 - ③ 魏帝の詔に「銅鏡百枚」「国中に示せ」などあり、各地の首長の分与した鏡として、その分布からみて最もふさわしいこと。
 - ④ 中国から出土しないのは、倭人のために特別に作った鏡であるから。この考えが、これまでの伝統的な学説でした。
- ところが、これに対して、呉の工人が日本にわたって来て作ったものだとする「国産」鏡説が近年、有力になっています。

その理由というのは、

- ① 中国からそもそも1枚も出土していないこと。
- ② 中国の画像鏡や神獣鏡の文様とよくにているが、日本独特のモチーフ（笠松形）が認められること
- ③ 銘文に「至海東」という句をもつものがあること
- ④ 日本では「三角縁仏獣鏡」があるが、当時の魏では仏教を装飾に取り入れることは行われていないこと

この説は、中国の研究者から主張されたもので、最近、存在しない「景初四年」

の紀年銘をもつ鏡の出土もあって、注目されています。

・紀年鏡の一覧

（魏の年号鏡）

「青龍三年(235)」	方格規矩四神鏡	京都府	大田南5号墳（方）
「景初三年(239)」	平縁神獣鏡	大阪府	和泉黄金塚古墳（方円）
同	三角縁神獣鏡	島根県	神原神社古墳（方）
「景初四年(240)」	斜縁盤竜鏡	京都府	広峯15号古墳（方円）
同	同	宮崎県	伝・持田古墳群
「正始元年(240)」	三角縁神獣鏡	兵庫県	森尾古墳（円）
同	同	群馬県	柴崎古墳（円）
同	同	山口県	御家老屋敷古墳（方円）

（呉の年号鏡）

「赤烏元年(238)」	平縁神獣鏡	山梨県	鳥居狐塚古墳（円）
「赤烏七年(244)」	同	兵庫県	安倉高塚古墳（円）
「元康□年(291~9)」	同	京都府	伝・上狛古墳

3。「三角縁神獣鏡」を持つ古墳の築造の意味

「三角縁神獣鏡」が中国製であるか、国産であるかについては、それぞれに長所・短所があって、結論はいまだ出されていません。

しかし、次のことには注目してよいといえます。

- ① 分布の中心は、18種類32面の同范鏡をもつ京都府の椿井大塚山古墳と、8種9面をもつ岡山県の備前車塚古墳の2カ所にあること。そして、全国で88種類275面に及ぶ同范鏡のグループが確認されていること
- ② 舶載の漢鏡が、製作時期からはるかに下った前期古墳から出土する例が畿内でも認められること（伝世）

そして、大量に埋められた鏡が同様の型式を含むことが多く、一括して輸入され保有されていたと見られること

すなわち、古墳時代の始まりにおいて、すでに鏡を宝器とする意識が広く普及していたこと、そして、「三角縁神獣鏡」を媒介とする各地の首長のネットワークが存在していたのではないのでしょうか。

潮崎山古墳に葬られた首長は、備後の南部において、いち早くこのネットに加わった「初代」の首長であったと考えられます。